



特集

恐竜・化石を活かしたまちづくり

三笠市

先進的な研究を身近に伝える

三笠とアンモナイト

三笠市立博物館は「日本一のアンモナイト博物館」と言われ、アンモナイトの展示数は約600点にもなります。平成23年にリニューアルを行い、その翌年から4年連続して来館者数が伸びています。さらに平成27年には日本経



▲アンモナイトの実物を取り出して説明を行う学芸員

三笠市では、市立博物館を核に、地域の自然遺産の保存・研究を積み重ねてきました。こうした蓄積と近年のジオパーク認定を背景に、地域の自然の成り立ちを伝える活動を行っています。

今回は、日本最大の恐竜全身骨格化石の発表を受けて恐竜研究の最前線である北海道で、「恐竜・化石」をまちづくりに活かす4市町を特集します。

済新聞のランキング記事「一つのテーマにこだわったユニークな博物館」で、関東以北の博物館で第1位に選ばれました。

三笠市は道内でも多くの種類のアンモナイトが見つかることで知られています。化石が集まる場所には、研究者が集まり、研究者が集まれば各地から化石も集まってきます。これにより三笠市は次第に「アンモナイトのまち」となってきました。市立博物館の充実した収蔵標本は、コレクターの方々の寄贈によるもので、市立博物館は市民の協力によって発展してきた博物館と言えます。

高い専門性

充実した収蔵標本を背景に、地域の化石を活かした活発な研究活動が行われており、今年度は、三笠産の異常巻アンモナイトの新種や、新属新種の海生鳥類化石の論文が発表されました。これらの研究発表は北海道博物館や北

海道大学との共同研究によるもので、

他研究機関との活発な研究交流の成果です。このような研究活動を行うために市立博物館には、道内で唯一古生物専門学芸員が三人も配置され、うち二人はアンモナイト専門です。アンモナイト専門家が二人配置されている研究機関は国内に他に例がなく、三笠市がいかにも先進的なアンモナイトの研究を目指しているかが分かります。

人に伝える、人を育てる

豊富な収蔵標本と高い専門性を持つ市立博物館は、良質な教育普及事業にも力を入れています。特に日常的に学芸員と来館者の距離が近くなるように努めており、館内では来館者と学芸員が気軽に会話をしている姿も時々見られます。また、学芸員による展示物の解説時には、展示ケースから化石を取り出し、見学者に実際に触れてもらうということを大事にしています。他に例のない充実した収蔵標本を持って



▲市立博物館の展示室

る当館ならではの、化石に対する理解を得るための最も有効な取組といえます。

三笠市では、市に長期滞在しながら周辺の地質・古生物の調査を行う学生たちに対して、市民が調査の手伝いや生活面など多くの援助を行ってきました。こうした活動が日本古生物学会に認められ、平成23年、市に対して貢献賞が授与されました。

今後について

平成25年の日本ジオパーク認定後、以前よりも多くの人々が訪れるようになった三笠市では化石はもちろん、石炭や石炭産業など、三笠の成り立ちと歴史について、より多くの人に知ってもらうための活動を今後も継続していきます。





特集

恐竜・化石を活かしたまちづくり

中川町

博物館活動から地域づくりへ
化石を媒体とした地域間交流

中川エコミュージアム

中川町全体を博物館とみなす中川エコミュージアムのコア施設である「中川町エコミュージアムセンター」は、平成14年7月開館の自然誌博物館兼宿泊型体験・研修複合施設です。「博物館は地域アイデンティティの集積の場であり、博物館活動を通じて、ダイレクトに地域づくりに寄与できる」という観点から事業を進めています。



▲中川エコミュージアムセンター
地域住民55人から構成されるNPO法人エコール咲くによって管理・運営されている

地域資源掘り起こし事業

エコミュージアムセンターでは平成27年から、「地域資源掘り起こし事業」として大型アンモナイト発掘など化石に関する調査活動を毎年実施しています。

中川町では平成23年と26年にアイヌ文化期の遺跡の測量試掘調査が行われました。この調査は専門家の指導の下、地元町民が参加した「オール中川」により実施され、その結果「何かを掘って見つけるのは楽しい」といった口コミが地域に浸透しました。平成27年から化石の「掘り起こし」でも、地元企業・町民を中心とし、さらに移住体験者や学生も参画するようになって、化石を媒体とした交流が生まれています。

このように地域資源掘り起こし事業は、単なる博物館の調査活動だけに留まらず、滞在人口の増加や長期化・二地域居住までを見込める事業として発展しており、現在、滞在場所の整備や

今回は、日本最大の恐竜全身骨格化石の発表を受けて恐竜研究の最前線である北海道で、「恐竜・化石」をまちづくりに活かす4市町を特集します。

中川町では、町全体を博物館とみなした中川エコミュージアムでまちづくりを進めています。現在、都会から地方への人の流れを促進するため、化石を牽引力として地域間交流を進めています。

滞在者の地域づくりへの参加の場の設置を進めています。

化石を媒体とした都市と地方の地域間交流

平成28年、中川町は世田谷区、下高井戸商店街、日本大学文理学部と中川町交流情報発信拠点施設運営協議会を設置。同年10月、下高井戸商店街に情報発信拠点である中川町サテライトスペース「ナカガワのナカガワ」をオープンしました。

平成29年には、交流のシンボルとして、日本大学文理学部にアンモナイトが贈られ、同大学文理学部の佐野充ゼミでは地域研究「中川町における人と自然の共生による地域づくり」がスタートしました。学生らは町内イベントへの参加など地域に溶け込んで研究を進めています。平成30年11月からは同大学文理学部資料館で中川の化石の展示会が実施される予定です。



▲下高井戸商店街にある『ナカガワのナカガワ』

また、約860名が在籍する世田谷区立松沢小学校との交流も進んでいます。平成29年6月には校内に中川町の化石紹介の展示ブースが設置され、9月には松沢小学校長等が中川町に来町され、町内を視察し教育相互交流について意見交換を行いました。10月には、中川町職員らが松沢小学校で化石教室を実施しました。

このように化石は中川町を知ってもらうためのシンボリックな存在であり、それを牽引力として、都市と地方の人そしてモノの交流が進みつつあります。



▲世田谷区立松沢小学校『ドキドキ土曜スクール』化石クリーニングの様子



特集

恐竜・化石を活かしたまちづくり

今回は、日本最大の恐竜全身骨格化石の発表を受けて恐竜研究の最前線である北海道で、「恐竜・化石」をまちづくりに活かす4市町を特集します。

あしよる

足寄町

北海道形成の地史を海の哺乳類から学ぶ

十勝の足寄町では、40年前に最初の化石が発見され、平成10年「足寄動物化石博物館」を開設しました。道東地域の関連化石や現生の骨格などを収集し、「海の哺乳類の進化」をテーマに活動しています。

今後について

デスモスチルス類は北海道を代表する化石といえ、多くの化石研究者が研究に取り組み様々な体形で復元がなされた「謎の化石動物」として知られています。足寄動物化石博物館では、骨格の研究から独特の特徴を見だし、従来にない考え方で復元を進めています。平成30年に開館20年を迎えるのを機に、デスモスチルス類の骨格を「泳ぐ姿」に組み立て直し、歴代の骨格と新復元を展示し、併せて「化石工房」での「ミニ発掘」などを通して化石研究の面白さを伝えていく方針です。

道東の化石

恐竜の化石は「東北海道」からは発見されていません。恐竜ばかりか、クビナガリュウやモササウルスも見つからず、アンモナイトすらごくわずかです。しかし、二千万年前以降、小さい島の集まりから次第に北海道が形成されてきた地史を反映し、「海の哺乳類」の化石はたくさん見つっています。

す。クジラ類、アシカ・アザラシ類、カイギュウ類、そして、デスモスチルス類。「北海道」というエリアを進化の舞台としていたことがわかります。

足寄動物化石博物館は、「海の哺乳類の進化」をテーマにして活動を進めています。展示室には、足寄町で見つかったおよそ2500万年前の原始的なデスモスチルス類やクジラ類をベースに、関連する化石や現在のクジラ骨格などをあわせ、二十数体の骨格が並び迫力満点です。

足寄で見つかる化石は世界的にめずらしいもので、デスモスチルス類もクジラ類も新種や新属であることを解明しました。足寄博物館は、十勝をはじめ道東地域の化石保管・収集・研究の中心的存在となっています。

独自の展示

足寄動物化石博物館の「化石工房」では特徴的な展示をしています。岩から化石の骨を取り出すクリーニングや



▲賑わう化石体験

レプリカ制作、骨格の復元などの作業を「作業展示」として全面公開しています。工房内の作業を間近に見ることができ、古生物復元の過程を知ることができます。また工房の一部に化石体験エリアを設け、石膏の模型づくりや実物の化石などを掘り出す「ミニ発掘」も提供しています。この「ミニ発掘」は実物の化石を掘り出す臨場感から高い人気を博し、平成28年度の入館者数2万3千人に対して1万9千個を提供しています。



▲化石工房での復元作業



▲展示の解説をする職員(安藤副館長)。「目の前・さわれる」が特徴





かみしほろちょう

@kamiishorotown



人が輝き町が輝く北の元気まち
かみしほろ
上士幌町

取材者
地域戦略課 七戸、横浜

地方と都市の交流をめざして ～上士幌町 ICTを活用した地域創生～

北海道十勝地方北部、町内面積の約76%が森林という上士幌町。酪農などの農業や林業が盛んな人口50000人程のこの町では、ふるさと納税額約21億円（平成28年度）という実績を誇ります。今回編集部では、上士幌町が道内外の人達から注目されるようになるためのICTを活用した取組について取材してきました。

都市と地方のヒトとモノの交流 それを実現するのがICT

平成13年、上士幌町の町長となった竹中貢氏は「都市と農山村の交流が活発でにぎわいのあるまち」の実現を政策の柱の1つに掲げました。そして、都市と地方が積極的に交流を図るためには、ICTの活用が不可欠であるとして、翌年には町に情報交流推進室を設置しました。

当時、ホームページ（以下、HP）は立ち上げたものの、そのまま情報が更新されていない自治体も多く、情報交流推進室がまず行ったのは、HPのリニューアルとそこに掲載する情報を常に更新するということでした。いずれもコンテンツの配置や内容など、いかにすればたくさんの方に興味を持ってもらえるかどうかを考えながら作業を行いました。

そして、より町の情報が気軽に見られるよう、平成20年には、全国で初めてブログポータルサイトを開設した和歌山県北山村のシステムを利用し、全国2番目、北海道では初となる、町で運営するブログポータルサイトを開設。道内外の多くの人に町の情報を知ってもらうための取

組が本格的に始動しました。

町ブログを活用して 地域の魅力をみんなが発信

町が運営するこのブログポータルサイトでは、閲覧者も自らのブログを作成できるといった特徴があり、上士幌町の魅力を知る様々な方が、町の魅力をそれぞれの視点で発信するようになりました。

ブログポータルサイトの立ち上げが先進的だったことや閲覧者がブログを作成できるといった特徴などが話題となり、当時、ブログポータルサイトの閲覧数は1日に4万件程に達し、町は注目を浴びるようになりました。

この結果、ブログポータルサイトの利用者が直接会って交流する「オフ会」を開催した時には全国からの参加申込みがあったほか、ブログが縁で移住につながったケースもあり、ICTを活用したヒトの交流のための地盤が構築されました。



町が運営するブログポータルサイト「かみしほろん.com」会員登録すると、閲覧者もブログ作成ツールを利用でき、ブログを作成することができます。

ツイッター開始・専門職員の採用 上土幌コンシェルジュの設立

平成22年3月、町ではより一層情報発信力を高めるため、町アカウントによるツイッターを開始。また、同時期には、地域おこし協力隊の全国公募を実施し、ICTに精通している職員を情報交流推進員として採用しました。

また、同年6月には、移住定住の促進を図るため地元有志により構成されたNPO法人「上土幌コンシェルジュ」が設立され、町が行っていた情報発信から、さらに移住希望者など都市との直接交流を図るための移住体験事業などを実施。移住情報サイト「移住.com」による情報提供や移住希望者の受け入れ、地場産品の通販サイト「十勝かみしほろん市場」の運営や商品生産者との連携など、ICTを活用したヒトの交流のほか、モノの交流のための地盤が構築されていきました。

これまでのコンテンツを強化 ふるさと納税での成功

その後、町ではHPの全面リニューアルを行いました。パソコン版、携帯版に加え、スマートフォン専用のHPも作成したほか、行政手続きやごみの収集日が手軽に確認できるような見せ方の工夫も

凝らししました。さらに平成23年にはフェイスブックにアカウント登録し、それまでのブログ・ツイッターに加え、SNSを活用した情報発信を強化しました。そして情報発信力の強化、商品の充実や生産者との調整を行う事業者の立ち上げとほぼ同時期に注目されたのが「ふるさと納税」です。

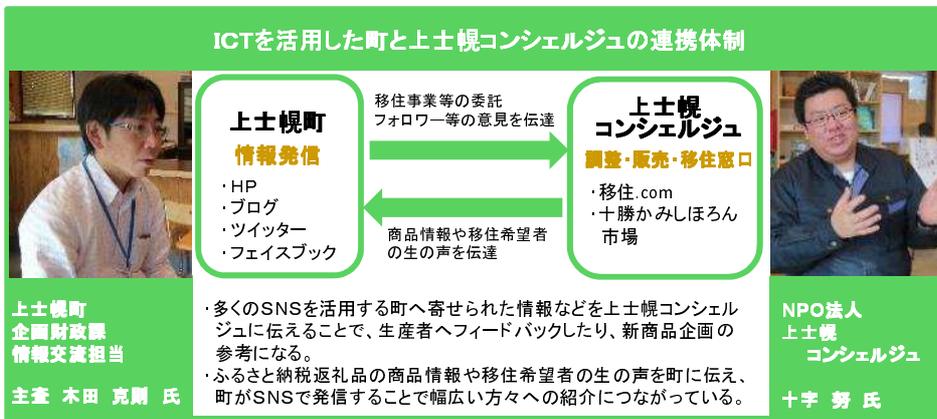


町に移住するにあたって役立つ情報を提供するサイト「移住.com」(上)と通信販売サイト「十勝かみしほろん市場」(下)。NPO法人「上土幌コンシェルジュ」が運営。

地元産品で開発したこれまでの商品を「ふるさと納税」の返礼品として活用し、また、その情報を町が保有するSNS等の広報媒体で常に周知するといった形で即座に「ふるさと納税」に対応することができた上土幌町。

平成24年に(株)トラストバンクが保有する日本最大級のふるさと納税紹介サイ

ト「ふるさとチヨイス」に参加したこと、さらに町の認知度が高まり、直近の平成28年度では、ふるさと納税額が約21億円(全国市町村で19位)に達しています。ICTを活用し、町の情報を発信、併せて、町を応援してくれる方々の声を聞きながら商品開発してきたこれまでの取組はこのように実を結びました。



町のファンへの恩返し 寄付者とのふれあい

平成20年には1件だった上土幌町のふるさと納税による寄付件数は、平成24年度以降、爆発的に増え続け、平成28年には95183件となりました。

これには寄付者の利便性向上のためのカード決済の導入や申込みフォームの改善を行ってきたことが背景にあります。

そして町が次に考えたことは、寄付者と実際に会い、感謝の気持ちを伝え、寄付者の生の声を聞くということでした。

こつこつと思いから、平成26年度以降、町では首都圏や関西圏のふるさと納税の寄付者を会場(東京、大阪)に招待し、上土幌町の魅力をさらに伝え、寄付者の生の声を聞く交流イベント「もっと伝えたい、もっと知りたい上土幌フェア」を大々的に開催しています。



平成28年1月に東京で開催されたフェアの様子。会場では「十勝ハーフ牛」などの特産品が食べられるイートインコーナーや町の紹介コーナーなどが設けられ、約1700名の方が訪れた。